

これからの教育環境を考えるワークショップ第1回「奈良市富雄第三小中学校施設見学」

参加者等から学校への質問とその回答（要点）

問1 富雄第三小学校から国・私立の中学校へ進学する子どもについて

答1

- ・本校から国・私立の中学校へ進学する子どもは、中学校開校前の8年間の平均では14.2%
- ・平成22～26年度の平均では7.6%と半分に減少
- ・このまま本校に進学させようとする保護者が増えていると考えている

問2 小中一貫教育として小学校から中学校まで統一性を持ったカリキュラムに関して、保護者の理解について

答2

- ・PTA総会等を通してカリキュラムや特色について説明しているほか、開校の際に自治会で広く話し合っていたり、御理解いただいていると考えている

問3 - 1 開校から30年以上経ったまちの移り変わりについて

答3 - 1

- ・児童生徒数は、ピーク時は1学年200人くらいいたのが、現在の6年生は98人で、その他の学年は60～70人台が多い
- ・今の1年生は88人と増えたが、来年の予定者は61人、その次は40人台となっていく見込み
- ・そのような理由もあって、隣の校区から通学することが可能な特例を設けており、少しずつ隣の校区から本校を選ぶ児童も増えている状況

問3 - 2 この地域で育った子どもが子育て世代になって、再びこの地域に住むようになったというようなことはあるか

答3 - 2

- ・本校で学んだ子どもが成長して、その子どもがここで学ぶというところまでは年数が経っていない
- ・この校区は、お年寄りだけの世帯も増えているし、中古住宅を購入して転入してくる方もいる
- ・少しずつ高齢化が進んでいる状況

問4 通学時間について

答4

- ・通学に要する時間は、低学年の子どもで最大30分程度
- ・校区内に信号はなく、歩道が整備されているので安全面ではそれほど問題はない
- ・希望して隣の校区から通学してくる子どもについては、奈良市がバス代を補助している

問5 特別支援教室の使い方について

小中一貫教育の特別支援学級の子どもへのメリットについて

答5

- ・特別支援学級では、小中合同の取組や年齢等によって個別に行う授業、特別支援教室を通常学級の子どもに開放して交流する取組、特別支援学級での学習と通常学級での交流を組み合わせた取組を行っている
- ・特別支援教室は設計段階から優先して考えており、小学校は広いサイズ、中学校は標準的なサイズだが、どちらも間仕切りを活用し状況に応じて柔軟な使い方ができるようになっており、9学年通して多様な使い方をしている

問6 施設一体型であることでの様々な支援を要する子どもへの支援のメリットについて

答6

- ・全学年の教員が、支援の必要な子どもへの個別の指導法についての研修を受けている。どの教員も全ての子どもに対応できるようにしている。

問7 施設一体型小中一貫校での経験がなく赴任してくる教員の意識について

答7

- ・本校に新たに赴任してくる教員は、小中学校が一体的に運用される本校の運営について、何らかの違和感や発見があるようだが、毎日同じ職員室で小学校の教員と中学校の教員が顔を合わせてお互いのやっていることを見ていると自然となじんでくる
- ・授業時間が違う1～4年生と5～9年生で（合同行事などの）同じことを進めていかなければならない時は調整が難しいが、別々にやった方がいいのか一緒にやった方がいいのか分からない時は、まずは一緒に取り組もうという方針

問8 子どもの学習の理解の進み具合や教え方の違いなどについて、小中学校の教員同士の意識の違いの解決方法について

答8

- ・職員室を一緒にすることによって、小学校と中学校それぞれでできることとできないことを理解した上で指導につなげ、解決することができると考えている

問9 学力等、施設一体型小中一貫校になったことで数字に表れている効果について

答9

- ・比較できるデータがないので検証できない

見学当日の学校の取組紹介から...

<参考：富雄第三小中学校「平成25年度全国学力・学習状況調査（中3）」より>

「英語の学習は好きですか」について、そう思う、どちらかと言えばそう思うという

肯定的な意見の割合71% <県（公立）平均53.7%、全国（公立）平均53.0%>

問10 学童保育について

答10

- ・学校の中に併設されており、小学生を対象に夜7時まで実施している
- ・今年1月から試行実施で、4月から本格実施の予定